

	<h1>みずみどり</h1>	2004年11月15日	第45号
発行：いたばし水と緑の会 事務局			
年会費 2,000 円 郵便振替 00170-8-352508 いたばし水と緑の会			
http://homepage3.nifty.com/mizutomidorinokai/			
E-mail : mizumidori@nifty.com			
〒174-0063 板橋区前野町 5-31-7 瀬田方 tel&fax3969-7124			

ガ ガ イ モ (ガガイモ科)

赤塚城跡公園のバッタ広場もできて4年、だいぶ植相が変わって、チカラシバなどの多年草と陽樹のエノキの幼木が優勢です。これらに絡みつくズに混じてガガイモのゴーヤを細くしたような実が人目を引いています。私にとってこの実は子供の頃の楽しい思い出のひとつです。

初冬の晴れた日、誰ともなしにガガイモの実を教室の窓辺にそっと置いておく。小春日和に暖められ、実の片側に口が開いて中から鱗のようにぎっしり並べられた縁に翼を持つ茶色の種子と、きちんと梳られた白髪のような光った毛が現れます。

やがて、この毛が大きく広がり、ほんの少しの空気の動きにもふんわりと浮かび上がります。こうなったら教室内は大変です。ある者は下敷きや教科書で扇ぐ、ある者は口を細めて吹き上げる。その次は決まって先生の大声が落ちてきます。「誰だ。そんな物を持ってきた



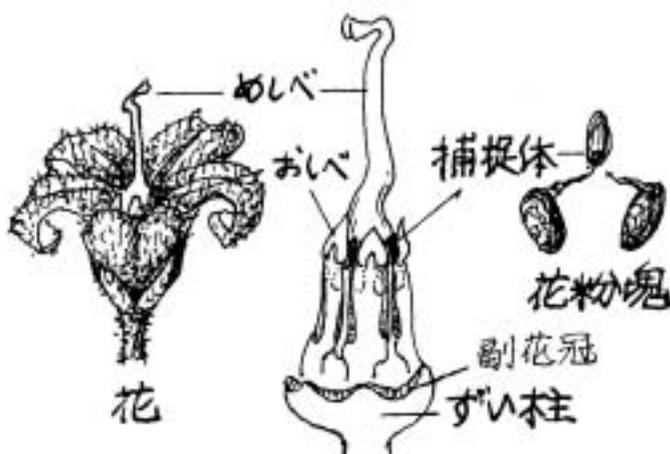
2003年12月7日
バッタ広場

のは。」大声とは反対に先生の目はいつも笑っていました。私たちもこの大声を期待していたような気がします。

ガガイモの白い毛は、タンポポの冠毛とは少し違って、沢山の毛が種子から髪の毛のように生えています。そこで、こうした毛を種髪と呼んでいます。昔はこの毛を止血のために傷口に当てたり、朱と練り合わせて印肉としたり、錆止めとして針刺しに用いたそうです。ガガイモを草斑枝花(くさばんや)とも呼んでいます。

表面にでこぼこがあり、先が少し鉤状になった実(袋果)を気味悪く見たのでしょうか蛇頭草の名もあり、種子が飛んだ後の実の内側がとてすべすべしていることから輝実(かがみ)の意として鏡草の呼び名もあります。また、出雲神話では、この殻を小船にして少彦名神(すくなひこなのかみ)が乗って来たとなっています。(絵本野山草 橘保国著 文化3年版・1806年)どんな所が神とつながったのでしょうか。

11月では見られませんが、花もなかなか変わっています。先が5つに割れている合弁花ですが、淡紫色の花冠の内面にぎっしり縮れた毛が生えています。この花冠の内側に、もう一重の花冠(副花冠)があります。中心には長い雌蕊を取り囲んで5本の雄蕊がぴったり張り付いて筒のようになっています(ずい柱)。雄蕊には硬い花粉の集まり(花粉塊)が捕捉体で2つ繋がれています。こんな手の込んだ花の造りをして、どんな昆虫に花粉を運ばせようとしているのでしょうか。



ガガイモの葉は少し厚手で、茎や葉をちぎると白い汁が出てきます。根も少し膨れた芋のようになっています。古くは葉を腫れたところに張ったり、葉や根を強壮のため食したそうです。そのため乳草・蘿芋(かがみいも)・蘿摩芋(らまいも)等の呼び名もあります。しかし、ガガイモ

のガガは何のことでしょう。かがみいもの訛りでしょうか。

古名・方言名を探してみると多いことに驚かされます(草木名彙辞典では32の名)。今はただ綿毛を飛ばす子供の遊びにしか利用されないようですが、古くは人々の生活に深く関わっていたのでしょ。まだまだ秘められた事が沢山ありそうで、とても気になる植物です。

(篠原 智男)



2004年8月17日バッタ広場



2004年9月26日バッタ広場

赤塚公園のゴミ拾いをします

毎月の定期観察会では観察ルート周辺のゴミも拾いながらの「ついで清掃」ですが、年1回林の中にも入って徹底的にゴミを片づけます。参加して下さる方は最後のページ活動のお知らせをごらんください。

ゴミは、かん、ビン、ペットボトルに食品包装材、それにこれらが入っていたらしいポリ袋などのほか、ご丁寧にポリ袋に入った犬の糞、それから粗大ゴミなど持ち込んで捨てたゴミがあります。写真は、昨年林内の数カ所に捨ててあったケーブルで、銅線は抜き取り外側のビニールだけ大量に捨てられていました。ケーブルは新品で、れっきとした犯罪。

見通しの悪い緑の多い環境が、ゴミ捨て場にならないようを、私たちも注意しなければなりません。



バッタ広場 植生の変化に驚くばかり

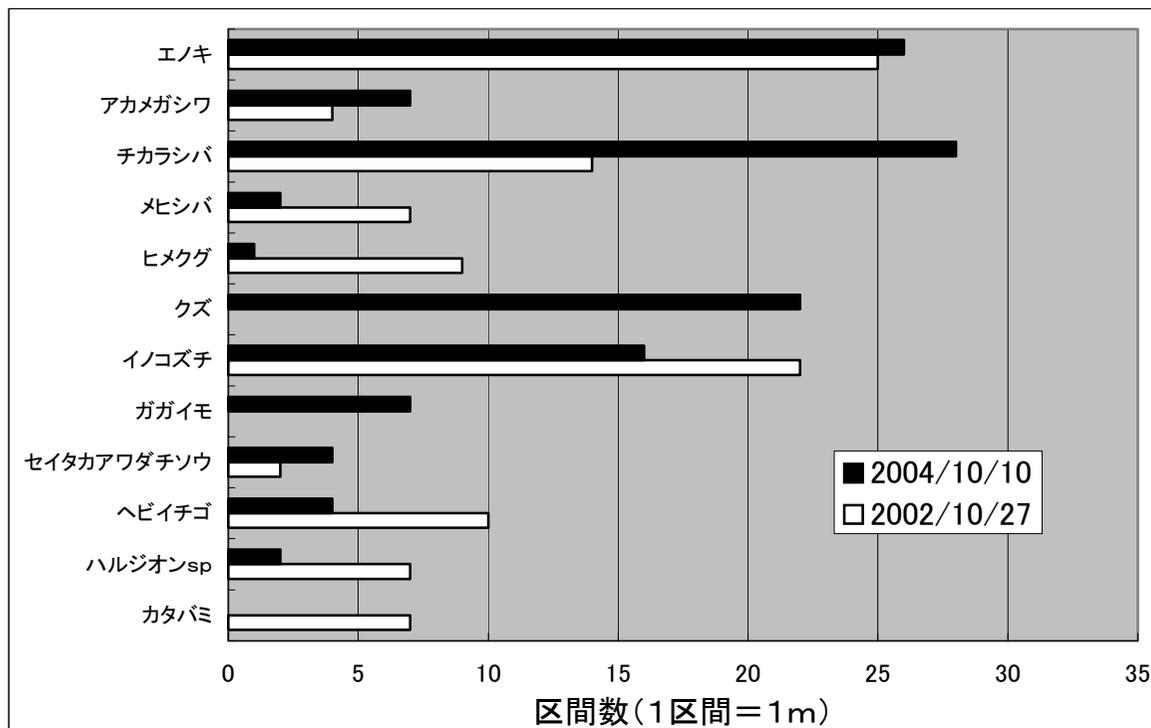
2002年10月と2004年10月の調査結果から植生の変化をご紹介します。2002年10月は自然のまま2年半たった状態、2004年10月の調査は、南側で木を2回、北側で木を1回、ササを1回切った後の状態です。

調査は南北約33mのライン上の植物(と樹木の場合は樹高)を1mを1区間として区間ごとに記録する方法です。全部の植物についてご紹介すると煩雑になるので、グラフには7区間(1区間は1m)以上で出現した植物だけ示してあります。それによく目立つセイタカアワダチソウを加えました。

エノキの本数だけ比較すると、現在は2002年の頃と同じ位です(つまり木の本数は木を切る前の状態に回復したように見える)。木の高さの比較は次回をご紹介します。

2年前にあったタカバミ、チドメグサ、ハルジオン、ヒメジオン、ギシギシsp、コナスビ、セイヨウタンポポ、ハナタデ、イヌタデは負けて消えてしまいました。刈ってはどうかという声があったくらいはびこっていたイノコヅチはダウン傾向か？そして新勢力はクズ、ガガイモ。地下茎で増えるセイタカアワダチソウは1本の株が数本になって？派手に目立っています。

「そんなことわざわざグラフにしなくても見ればわかる」と言われそうですが、過去の状態が記録されていればこそ、調査をしていて納得できるのがおもしろい。植物が精一杯生きているバッタ広場は、生き物も多く、生命の輝きを感じる場所です(坂本 郁子)。



西台に残っていたシロヨメナの移植について

発見と同定

2003年9月、西台1丁目3番地、と7番地の斜面に残されていた雑木林は永久に消滅した。環状8号線道路工事のためである。高木層はクヌギとイヌシデ、ケヤキが多く、イヌザクラ、コナラ、ムクノキが混じり、中、低木層にはシラカシ、シロダモ、カマツカ、エゴノキ、ハンノキなどが見られた林であった。林床はアズマネザサが繁茂し、単調であったがよく見ると面白い植物が所々に生えていた。

付近に残された樹林地の中で、最も昆虫相が豊富そうだと目をつけ調べ出したのが1999年のこと。その頃から気になっていた植物があった。秋に白い花が咲く、割合背が高いキク科の植物であった。3番地と7番地のちょうど境目の樹林地内に毎年10数本は見られ、これ以外はどこにも無かった。外見はありふれているが、図鑑をみても良く分からない。こんなチンケな花で園芸植物はないだろう、多分野生種だろうと見当はつけたが、それ以上は調べなかった。

2003年8月、いよいよ伐採の時期はせまってきた。分からないまま、消えてしまうのも心残りなので、一株だけ地下茎を掘り出し、自宅の植木鉢に植えておいた。花が咲いてから、じっくりと調べてみる、絵合わせではイナカギクとなったが、そのままになってしまった。本年秋もう一度調べなおし、ノコンギクの亜種にあたる、シロヨメナ *Aster ageratoides* TURCZ. subsp. *leiophyllus* (FRANCH. & SAV.) KITAM. と同定した。なお元赤塚植物園囑託の篠原智男氏にも同定をお願いし、シロヨメナであろう、とのお答えを頂いている。(学名は国立科学博物館専報第34号 皇居の生物相 I. 植物相による)

板橋区周辺のシロヨメナの現状と生息環境

植物調査の資料をろくに持っていないので、ほとんど不明である。手持ちの文献では北区、江東区、板橋区では記録なし、記録があるのは港区自然教育園と皇居だが、両者とも自生か植栽起源かは不明である。板橋区内で他に分布地があるかもしれないが、少ないことは間違いないであろう。都下の記録は多いが、山地、丘陵地、台地の順に少なくなっていくようだ。埼玉県では南部平野部でも広く見られるようで、新座市(ヤマシロギクの名で記録)、和光市の記録をみている。

先日、久しぶりに奥武蔵の笠山をたずねた。秋の花もほとんど終わっていたが、沢筋の杉林にはシロヨメナがたくさん咲いていた。ノコンギク、カントウヨメナは開けた河原や畑の周囲

など明るい環境に多く、シロヨメナとは混生しないようだ。シロヨメナとノコンギクは同一種の亜種関係にあるとされる。昆虫などの動物をやっている者には植物分類の亜種、変種の扱いには戸惑ってしまう。同一地域の異なった不連続な生息環境に住む近縁種、いくら外見が似ていても昆虫ならば間違いなく別種に分類されるであろう。



移植の是非

昔から生き長らえてきた動植物が、開発により消えてしまうのはさびしい、ほかの場所で生き延びて欲しい、こんな単純な気持ちから書いている文である。自生地が無くなってしまうのなら、記録と標本保存だけでいいのではないか、あるいは植物園など人為的管理の下で保存すべきではないか、どちらも当然の論であろう。ただ私はなるべく元の生息地に近い、似たような環境でまた花を咲かせて欲しいと願っている。

自然地への移植の是非、もし移植に賛成ならば、候補地、移植後の管理など、あるいは同定への疑義等、みなさんのご意見を広くうかがいたい。

連絡先は釣巻岳人 〒173-0015 板橋区栄町 9-8 TEL 3961-2875 FAX3964-4314
E-mail: turimaki@muji.biglobe.ne.jp または いたばし水と緑の会事務局 〒174-0063

(付記)

自然地への動植物の移入、移植はなるべく避けるべきだが、やむを得ず行う場合は最低限、次のことを実行してもらいたい。これは今後の動植物分布調査、自然環境調査に無用の混乱を引き起こさないためにも必要なことである。

移入種は正確な同定(同定者名を明記)を行い、和名とともに必ず学名を併記し、元の分布地名、個体数、移植先地名、移植年月日、実行者団体名を文献等に公表すること。ただし盗掘や密猟の恐れがある場合は、公表方法に工夫が必要であろう。

(釣巻岳人)

フィールドワーク「都市に残された自然を考える」 —赤塚公園における自然の保全と再生—

会では、秋に会員以外の方たちと交流をもつイベントを実施してきました。今年は、10月23日(土)に「都市に残された自然を考える」—赤塚公園における自然の保全と再生—と題してフィールドワークを実施しました。参加者は会員と自然保全活動をされている方達等18名。

また今回は、(財)日本生態系協会の田邊龍太さんに来ていただき、コメントやアドバイスをお願いしました。

赤塚公園は武蔵野台地がおわるところにあり、やや乾燥した崖上と、やや湿った低地(と湧水)があり、平坦な場所は公園広場、利用しにくい急な崖は樹林地になっています。農地や雑木林が次々と開発され、幅の狭い島のような北斜面の樹林地が赤塚公園に残っている自然らしい場所です。水と緑の会は、崖下の湧水ビオトープ、崖上広場の草原ビオトープをつくり、その後の管理を行ってきました。その自然保全・再生実験のあらましを、釣巻さんの説明を聞きながら観察、意見や疑問点を出し合い、自然再生のあり方を話し合いました。

最後に田邊さんから、「ドイツに行ったときに、生き物のために枯れ枝を積んであるのを見たが、ただ積むのではなく、芸術作品のモニュメントのように美しく積んであった。自然を取り戻すときに、そのような景観的に美しくする工夫(美意識)も必要である」、というコメントもありました。昔の自然風景とイメージが重なるような自然再生の心配りが、一般の公園利用者の共感を高めるということです。大変参考になるご意見でした。

活動のお知らせ

運営委員会は毎月第1金曜日です。どなたでも参加できます。

12月運営委員会： 12月3日(金) 18:30～20:30

終わったら忘年会をしながら、新年会の相談でも。

1月運営委員会： 1月7日(金) 18:30～20:30

いずれもエコポリスセンターです。

会報の印刷・発送は奇数月。お手伝いできる方は応援よろしく

日時：1月18日(火) 18:00～ 場所：エコポリスセンター

活動の問い合わせは瀬田まで(3969-7124)

原則として毎月第4土曜日が定例の活動日です。この日は、赤塚や徳丸が原公園で私たちが作った自然の場所を中心に午前中は自然観察とゴミ拾い。必要な修理等があれば午後行います。観察会は雨天も実施します。

11月の活動 徹底ゴミ拾い

日時:11月27日(土)10:00～12:00

集合場所:美術館前トンボ池

持ち物:軍手、ゴミ袋、

雨天の場合:12月4日に延期

12月の活動 ホタルの水路の泥さらえ

10月の記録的な降水量にもかかわらず、ホタルの水路に水が流れていません。なぜか。どうも大雨で土砂がたまり、水路が上り坂になっているようです。せつかく地下水が増えているので、水路の泥さらえをして今年最後の汗を流しましょう。

日時:12月4日(土)10:00～12:00

集合場所:美術館前トンボ池

持ち物:軍手、水路が狭いので十能があると便利かも。

★ 自然共生研究センター研究報告会2004

日時:11月26日(金)午後1:30～4:30

場所:発明会館ホール(虎ノ門2-9-14)

内容:第1部:水際環境と水生生物

第2部:川の生態系を支える洪水の役割

参加費:無料

問合せ・申込先:独立行政法人 土木研究所 自然共生研究センター

0586-89-6036 FAX0586-89-6039